

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 河野 龍也

本論は佐藤春夫の特異な芸術至上主義のありようを、身体の不可知性、という観点に着目した上で、彼がそこからいかに「詩」と「小説」をジャンルとして区別して行ったか、という経緯を明らかにした論考である。あわせて春夫と台湾との関わりを中心に、彼があらゆる意味付けを拒む被支配者の心情を見出していた、という観点から、その特異な「植民地」観の再評価が試みられている。

構成は三部からなる。第一部では、『ある女の幻想』『円光』等の初期作品を対象に、「自我」がきわめて不安定なものとして扱われ、なおかつこうした「不可解な身体」を超えて自己の統一をはかるため、意図的に芸術至上主義が演じられねばならなかった必然が浮き彫りにされている。すなわち彼にとっては自己統一の希求の形式として「詩」があり、そこから脱落せざるを得ない姿を描く手だてとして「小説」があった、というのがその見取り図である。従来、抒情詩から散文へ、という単純な図式で捉えられがちであった佐藤春夫像にあらたな修正をはかる論点として注目される。さらにこの問題が近代文学における「自然」表象の問題に敷衍され、自然を冷徹に客体化しようとするまなざしが、同時にそれとの一体化を阻んでしまい、かかる撞着が結果的に「祈祷」という言語的パフォーマンスを生み出し、自己救済として芸術を理念化していく道筋が明らかにされている。

第二部では、代表作である『田園の憂鬱』を対象に、「見る彼」と「見られる彼」とが分離、反転しつつ、結果的には内とも外とも付かぬ中有の世界を生み出していく様相が明らかにされている。複雑な作品成立のプロセスが検証された上で、前半の批評的な語り、後半では次第に主人公自身の自意識に組み込まれていく道筋が明らかにされている。対象の非合理性ゆえに語りが解釈主体としての限界を背負い、まさにそれゆえに想像力が発動していくことになるという主張は、従来、空想的な美意識の発露として評価されてきたこの作品により根本的な再検討を迫る見解である。

第三部は1910年の台湾旅行に題材をとった『女誠扇綺譚』を中心に、当初コスモポリタニズムを信奉していた「私」が、次第に植民地を語ることの無力と限界に突き当たっていく過程を明らかにしている。春夫が訪れた当時の廈門の状況の綿密な探査をもとに、随筆『南方紀行』から『廈門のはなし』に至る過程で、次第にそのナショナルアイデンティティが変質していく過程も明らかにされている。対象の不可知性、というまなざしをもって台湾に向き合った大正期の春夫の姿に、第二次大戦下の活動とは異なる可能性を評価する見解は傾聴に値するものである。

総じて論理が晦渋に傾くきらいもあるが、白樺派に代表される同時代の「個性」への信仰と多分の共通点を持ちつつ、一方で「自己」への懐疑から「詩」と「散文」に関する独自のジャンル認識を育み、結果的に「自我」の完成が芸術の完成に一致する、という同時代の芸術至上主義を相対化していくことになる道行きを導き出したその成果は高い評価に値する。

以上の点から本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。